

秋の中

谷口 あさこ

朝、目を覚ますときの気持ちは面白い、と言っていたのは女生徒だったかしら。

かすかな物音が耳をなでる。これは、葉擦れの音？ 何かが木々や地面をたたく音？ 雨が降っている？ 体中の感覚がひらいていくと同時に首筋に鈍い痛みが広がっていく。目が開く。カーテンの隙間から薄明かりが射し、隣のベッドのシーツがほの白く光る。室内がいつも

よりひんやりしている。ゆっくりと反対側に首を回す。ベッドサイドの置時計が六時を示している。

二度寝がしにくい体質だということは、長年の経験から分かっている。ベッドの上で一度うつ伏せになってから前腕をつけて上半身を起こす。ベッドの上に座り込むと首筋のリンパを手で軽く押した。若い時は一晩寝たら疲れが取れていたのに、六十七歳の今は寝起きの時が一番コリがひどい気がする。

右回り、左回りと首をゆっくりと回す。ふくらはぎを両手で揉みほぐす。そして、ゆっくりとベッドから立ち上がった。

窓のカーテンを開けて、細く開けっ放しにしていた窓を大きく開ける。芝生も物干し台も濡れておらず、雨の音と思ったものは、遠くで電車が通りすぎる音だったのだろう。向かい側に生い繁る木々は緑の枝葉を広げ、枯葉がひらりと舞い落ちる。深呼吸すると金木犀の香りが鼻腔をくすぐる。

窓を閉じると、ダンスへ向かう。今日は何の服を着よう。と言っても大した服は持っていない。体形が緩んできた五十代から、シルエットがゆったりした服ばかり着ている。今日は白と青のストライプのチュニックシャツに紺色のズボンにしよう。ズボンを履くために片足を上げるとグラリとふらつく。危ない、危ない、こういうの

が怪我のもと。ダンスに寄りかかって、ゆっくりと身に着ける。

着替えを終えて寝室の扉を開け、隣の居間に入る。今まで静物ばかりだった部屋の空気はひどくよそよそしい。五感がこの空気になじむのを拒否している。そんな感覚に抗うように突き進む。カーテンを開け、窓を開ける。居間の端にある小さなお仏壇に手を合わせ、「久志さん、おはようさん」と写真の中の夫に声をかける。夫は肩まである豊かな銀髪を見せつけるかのように笑っている。薄毛には縁のない人だったなあと思ひ起こす。

洗面所で顔を洗って、軽く化粧をする。皺を伸ばしながらファンデーションを塗りこめる。頭頂部の髪の毛が薄くなってきたのを隠すために、長めに伸ばした前髪を後ろに撫でつけて頭頂部を覆いピンで留める。

身支度が終わった後、洗濯機を回す。一人分の洗濯物は少量だが、夫や息子たちが居たところから、毎日洗濯することが習慣になっていたので溜めておくと気持ちが悪い。

洗濯機が回転している音を聞きながら、やかんに残っていた湯冷ましをグラスに半分ほど注いで飲み干す。残りの湯冷ましを小さな湯呑茶碗に注ぐとお仏壇まで運び夫の写真に供えた。

ガチャと窓の外から扉が閉まる音が聞こえる。私はゆ

っくりと南に面した掃き出し窓へ向かう。タンタンタンとリズムカルに階段を降りる足音が聞こえる。それは砂利を踏む音に変わり、しまいにカチャンと金属が軽くこすれる音が響いた。私はガラス窓を広く開けて顔を出す。二階に住んでいる大家の奥さんが自転車を押して門の方へ進んでいくところだった。

「おはようさん」

「おはようございます。今朝はちょっと涼しいですね」私のあいさつに知絵子（★ちえこ）さんは振り向いて返事をしてくれる。朝にうってつけな明るい声。聞くだけで元気が出てくる。今日も一日頑張ろうって思える。

「ちょっと寒いぐらいだね」

私は腕をさする仕草をしながら言葉を返す。

「でも、昼間はあったかくなるみたいです。洗濯日和って天気予報で言っていました」

そう言って自転車にまたがると「いってききます」と手を振って門から出ていった。彼女は市立病院で清掃の仕事をしている。とってもえらい。新型コロナウイルスが流行していたころは大変だったと彼女の旦那さんが言っていた。本人からはその時の話を聞いたことはない。

知絵子さんを見送ってから朝食の準備。軽くトーストしたロールパン一つ。トマトを半分。ドリップでゆっくり淹れたグアテマラコーヒー。これだけで十分。若い時

は目玉焼きやウインナーやヨーグルトなどもつけていたが、今はすぐにお腹がいっぱいになって苦しい。

テレビをつける。朝のニュース番組はどここの局も一緒。裏金議員のその後、お米の高値止まり、熊が市街地にやってくる、車が店に突っ込んだ。そんな話題をあの手この手で報道している。世の中はいつでもどこでも何か起きています。今日は何事もない平和で退屈な一日でした。アウンソーが言って終わる日があったら面白いのに。

洗濯終了のメロディが流れる。脱水が終わってよじれた洗濯物を取り出す。洗濯物が入ったカゴを持って、掃き出し窓から外に出る。

建物の東側に回ると物干し台が置いてあり、洗い終えたばかりのTシャツや下着やタオルなんかを干していく。両手で布の両端を引っ張って、皺をピンと伸ばす。まっすぐ伸びた洗濯物は見ているだけで清々しい。口元目の皺もピンと伸ばして一緒に干したい。

物干し場の向こう側、ブロック塀で仕切られた先は鎮守の森で、ブナ、コナラなどが生い繁っている。そのため、広い庭の一部は木陰になり、朝九時過ぎまで光が当たらない。ブロック塀の所々は濃緑色に苔むし、枯葉がひらひらと芝生に舞い落ちる。夫が気に入って借りたこの住まいは、朝日が射さないところ、晩秋に落ち葉が積

もるところが当初不満だった。十二年経った今、こことは別のところに住むことは考えられない。

中に戻りぼんやりテレビを観ていると画面の時刻表示が七時四十五分を告げる。あら、もうこんな時間。慌てて玄関に行きスニーカーを履く。扉を開けるとすぐ前庭が広がっている。右半分には石畳が敷かれ、車が三台と自転車が数台停まっている。残り半分は芝生が広がってツジや沈丁花や金木犀が植えられ、庭と道路を隔てる生垣にサザンカが植えられている。今は金木犀の季節。オレンジ色の小さな花が芳香を放ち、秋の訪れを否応なく感じさせる。

石畳を歩き門を出る。左手に進むとサザンカの生垣から手入れされた竹垣に変わる。竹垣の中には立派なクスノキやシイがそびえている。枝先の葉が黄色くなり始め、道端にはドングリがたくさん落ちていた。できるだけ踏まないように避けて歩く。しばらく行くと竹垣が途切れ左側の視界が開ける。開けた場所には小さな池やベンチがあり、その奥に鳥居が見えた。そこで立ち止まると鳥居に向かっで一礼。鳥居の奥には春日造の本殿がひっそりと佇んでいる。私は鳥居に背を向けると、目の前の道路の左右に視線を巡らした。

車がぎりぎりすれ違えるほどの生活道路。歩道もなく、白線の路側帯もない住宅街の中の道。その道路の右手奥

からやってくる人影が見える。一、二、三人。いつも早く登校する三人組の男子児童。ランドセルをガタガタ言わせながら走って来る。先頭の青色のランドセルの子が私に向かって声を上げる。

「今、何時？」

「おはようさん、七時五十分だよ。余裕があるから歩いて行こうね」

「クラスで一番目指してるから、ムリ」

そう言って走り去っていく。パキパキとドングリを踏みつぶす小さな音。彼らの後姿を見送っていると、反対側から「おはようございます」と明るい声があった。振り向くと琥珀色の髪的女性と自転車を押した黒髪の女子高生が立っていた。三階に住んでいる緑川(★みどりかわ)さんと娘の咲穂(★さほ)ちゃんだ。

「おはようさん。今日は出社の日？」

「そうです。事務所に新しいパソコンが届くので受け取って設定しないとイケなくて」

「大変だね」

「たまには出社しないと、体がなまっちゃう」

朝からおしゃべりな緑川さんとは反対に、咲穂ちゃんは愛想笑いも見せず、我関せずと自転車にまたがるとサッと離れていく。

「お母さんは帰りが遅くなるから、夕ご飯食べといて」

緑川さんは娘の背中に声をかけるが、彼女は振り向きもしなかった。

「思春期だから扱にくくて」

緑川さんは苦笑を浮かべる。

「まあ、私も高2の時なんか、親の言うこと全然聞いてなかったし、こんなものかな」

「咲穂ちゃんはしっかりしてるよ。お母さんの背中を見て立派に育ってる」

緑川さんと咲穂ちゃんは二人で暮らしている。上の娘さんは社会人で一人暮らしをしていて、旦那さんはだいぶ前に亡くなったと聞いている。

「そうだといいんだけど」

彼女は心配そうにつぶやき、横髪を耳の上にかき上げる。朝日に当たってハチミツのように光る髪の毛がきれいだ。

「髪の毛、染めたんだね。柔らかい感じがしていいね」

私の言葉に彼女ははにかむように微笑む。

「ちょっと憧れてたんです。こういう女性っぽいのに」

以前の黒髪も十分女性らしかったのに、という言葉は飲み込む。隠居したお婆あちゃんは年下の女性の思いを無下にしてはいけない。

「ほら、皆、道路に広がらない。端に寄って」

遠くから大きな声が聞こえてくる。お肉屋さんの城山

(★しろやま)さんと民生委員の峰田(★みねた)さんが小学生の群れを引き連れながらこちらへ向かってくる。

「じゃあ、私も行ってきます」

それを合図に緑川さんは駅の方へと歩いていった。入れ違いのように城山さんと峰田さんが私の横に並ぶ。

「おはようさん」「おはようございます」

私たちの目の前を児童たちが通り過ぎていく。

「前から自転車が来てるから端に寄ってね」

峰田さんが道路に出て児童を誘導している。

「あの後、まっすぐ家に帰ったかい」

城山さんが前を通る児童に声をかける。

「帰ったよ。コロッケ美味しかったからまた買うってお母さんが言ってた」

「おう、また来てな」

城山さんの店では、コロッケやメンチカツなどのお惣菜も売っている。夕食の手間を省きたいときにとっても便利。ラードを使って揚げるのでカラッと揚がって風味が増すんだって城山さんが言っていた。

「おはようさん。気をつけて行ってらっしゃい」

黄色いランドセルカバーをつけた一年生の女の子たちが「いってきます」と返事をしてくれる。

通り過ぎる子供たちにそれぞれ声をかけるが、挨拶を返してくれるのは三分の一ぐらい。残りの子たちは、自

分たちの話に夢中で気づかなかったり、挨拶を返すということに考えが及ばないのか無視したりという感じ。章太郎や聡次郎が子供の時はもっとたくさんの子が挨拶をしてくれた。しつけが変わったのか、時代の流れなのか、何だか寂しい。

八時二十分ごろになると、通学路に児童の姿は見えなくなる。

「今日は十時半に広中さんのところに予約を入れてるの。今回も待たされるかと思うと今からイヤになるわ」

私のグチに峰田さんが返してくれる。

「A駅の整形外科ですか？」

「そう、最近また指の関節が痛んできて。布巾もしっかり絞れないし、ペットボトルの蓋も開けられなくて困っちゃって」

「不便なことがあったら言ってください。ジャムの蓋を開けるとか、お米を運ぶとか力仕事は任せて」

城山さんが茶目っ気を出して口をはさむ。

「ダーリン、頼りにしてます」

私は肉付きのいい彼の二の腕を軽く叩いた。城山さんは体が大きい。三十代の引き締まった体は健康と自信に満ちているのも納得がいく。彼が小学校のPTA会長を任されているのも納得がいく。

これから小学校へ打ち合わせに行くという城山さんと

民生委員の会合があるという峰田さんと別れる。途端に私の周りは静かになった。腕を広げて深呼吸する。空気はひんやりするが、陽光が射しているので寒くはない。

こんな風に過ぎしやすくちようどよいと感じる時期が短くなったような気がする。昔はもつと秋が長かった。枯れていく朝顔。色づく柿。高い空にイワシ雲。まあるい月。光るススキの穂。金木犀の香り。ふいに神社の境内に植えられたイロハモミジが頭に浮かぶ。もう真っ赤に紅葉しているだろうか。自然と足は参道を進む。短い参道の後、二の鳥居をくぐるとこぢんまりとした社殿がある。社殿の右脇に牛の銅像があり、それを覆うようにモミジが枝を広げていた。枝先の葉が赤く染まっているが、まだ全体的に緑色が強い。目を瞑って手を合わせる。二年前、夫はここで倒れていた。

八月に入ってすぐの暑い日の事。お昼前のワイドショーから「連続十日の猛暑日が続いています。ためらわずにエアコンをつけてください」と流れていた。急に玄関のチャイムが鳴る。

「すみません。大山さん、いますか？」

声とともに扉を叩く音がする。夫は散歩に出ているので私が応答するしかない。扉を開くと同時に民生委員の峰田さんが体をこじ入れてきた。

「旦那さんが倒れてて、今救急車を呼んでます」

言っていることが理解できなくて、私は呆然とする。

久志さんが？ 救急車？

「お財布と旦那さんの保険証と携帯電話を用意して。病院に行くから。早く早く」

良く通る声で急かしたてる。私は現実味のないまま、バッグに荷物を入れて外に出る。まだ、太陽が真上に上がっていないのに日差しが強い。帽子をかぶってこなかったことを悔やんだが、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきたせいでそんな些事はかき消えてしまった。

峰田さんが門を出て左手に向かう。神社の森の前を通り、鳥居をくぐって境内に入る。牛の像の前で男性が二人ほどしゃがんでいた。そのそばに横たわっている人がいる。

「……久志さん」

私が近寄ると、囲んでいた人たちが場を開けてくれる。

夫は意識がないようで私の声にも反応しなかった。

救急車が到着して夫と一緒に私も乗せられる。

「旦那さんに持病はありませんか？」

「特にありません。健康だけが取り柄で、病院にかかってないのが自慢で」

隊員は私の言葉にうなづく。

「おそらく熱中症だと思います。ただかなり重症なので

予断を許さない状態です」

朝食を食べてテレビの情報番組を見た後、いつも通り「ちょっと散歩に行ってくる」って出かけただけなのに。最近暑い日が続いてたけど、いつも三十分ぐらい歩いてきて「いい運動になった」と汗だくで帰ってきてたのに。どうして今日はこうなったの。私は夫を見つめながら無事を祈る。病院に着いて処置をしたものの、夫は目覚めることなくその日の夜にこの世を去った。

あれから二年。何故夫がこの神社の境内で倒れていたのだろう。ここから家まで五分もかからない。立ち寄りずに帰ってきたら死ぬことはなかったかもしれない。そんな詮無い物思いも最近は静まってきた。

私は目を開ける。枝先の赤い葉が揺らめいて、牛の像に影を落としている。光と影の複雑な形が次々と生まれ、踊るように変化していく。しばらくそれを眺めながら、ふと、久志さんもこの葉影のダンスを眺めていたのかも、しれない、と思った。

参道を戻って家に帰る。神社の鳥居を出てドングリを踏まぬように気をつけて歩くと、サザンカの生垣の向こう側に赤茶色の建物が見えた。石造りの門から中に入ると庭の奥に赤レンガでできた三階建ての建物がどっしりと構えている。それは裏手に迫る鎮守の森を背景にしつくりと溶け込んでいた。夫が終の棲家として選んだ場所。

十二年前、夫が定年を迎えた時に見つけてきた家だった。

「住宅街の中にポツンと取り残された山のように鎮守の森があつて、そこに古い神社があるんだ。古くて色あせた質素なお社なんだけど、手入れされていて見ていると穏やかな気分になるんだよ」

久志さんの興奮した声が頭の中に蘇る。

「鎮守の森には立派なクスノキやカシやシイが何本もそびえて厳かな雰囲気漂っているんだ。その中に、びっくりするほど赤いモミジの木があつて。小さいけれど昔ながらの神社の森だった。とても懐かしい感じがした」
とても気に入ったと繰り返し返す久志さんはいつもよりかなり雄弁だった。

「神社の横の土地には鎮守の森に連なるようにしてレンガ造りのお屋敷があつたんだ。立派な庭もあつて、ちょうど家主が垣根の手入れをしていたから、『いいところに住んでますね』って声をかけて、立ち話をしているうちに」
久志さんは目をクリッと見開いて一段と声を大きくする。首元で切り揃えた銀髪が揺れる。

「一階の部屋が借りられるって言うんだよ。完全分離の二世帯住宅になっていて、昔ご両親が住んでたそうなんだけど、今は空いた状態なんだって。これも何かの縁だな」

翌年早々に定年を迎えるため社宅を出なければなら

なかった。夫婦二人だけの終の棲家を知らない土地にするのに不安はあったが、夫は「大丈夫、大丈夫」と言うばかり。言うがままに隣の市からこの神社のある町に引っ越してきたのだった。暮らし始めて十年後、夫は神社の境内で倒れ亡くなった。これも何かの縁のせいなのか。それからもう三回目の秋を私はポツンと過ごしている。

待合室の呼び出しモニターに数字が表示されている。

56と書かれた番号券を握りながらその番号が表示されるのを待っていた。

広中整形外科は最寄り駅から三つ先の駅前にある。リウマチ専門の医師がいてこの界限で人気のある病院だった。だから、いつも会計で待たされる。紙の番号券を眺めながら、イソロク、イソロクと口ずさむ。この病院の待合室では名前は呼ばれない。受付時に渡された番号がその日の名前。今日の私はイソロクだ。

モニターに56が表示されると同時に、会計のお姉さんが「五十六番の方」と通る声で呼ぶ。私はゆっくり立ち上がると会計の窓口へ向かった。

病院を出た時、十二時を過ぎていた。お腹も空いたし、何か食べて帰ろう。駅直結の百貨店の中の喫茶店に入った。

サンドイッチを注文してから辺りを見渡す。隣の席には七十歳ぐらいの女性が一人、スマートフォンを見ている。向かい側には六十歳ぐらいの女性二人が賑やかにおしゃべりしている。奥の方には七十代と思わしき男女が無言でパスタを食べている。平日の昼間の百貨店は年寄しかないのかもしれない。

スマートフォンを取り出すと、緑色のアイコンの連絡アプリを開く。長男の章太郎と次男の聡次郎と私の三人のグループ画面に「美波さんと莉子さんのご実家に送るお歳暮、何がいい？」と打ち込んで送信する。せっかく百貨店のある駅まで出てくるのだからお歳暮の品を買ううと思っただけだ。すぐに通知音が鳴る。「なんでもいい。適当に送って」と会社の昼休み中なのだろう。すぐに聡次郎から返信があった。莉子さんは聡次郎の奥さん。美波さんは章太郎の奥さん。再び通知音が鳴る。「去年と同じお菓子で。お義母さんが美味しいって言ったから」章太郎からの返信だった。「んじゃ、俺んともそれだ」聡次郎がちゃっかり便乗する。こんなことでもなければ息子たちと連絡を取ることもない。「母さん、元気にしてる？」聡次郎が聞く。「指の関節は痛いけど、元気です」聡次郎から「元気だなにより」とタヌキが親指を立てたスタンプが、章太郎から「お大事に」の一言が送られてきた。

去年と同じお菓子っていうのも芸がないかしら。章太郎の奥さんの実家からは一切れずつバックされた魚の切り身だったり、牛肉の少量食べ比べセットだったり、いつも違った素敵なお歳暮が送られてくる。そうかと思えば、聡次郎の奥さんの実家からは毎年みかん一箱だ。近所のみかん農家から買っているらしい。さすがに一人では食べきれないから、大家さんや緑川さんや知り合いに配り歩いている。注文したサンドイッチが届く。私はスマートフォンをテーブルの脇に置くとサンドイッチに向き合った。

百貨店でお歳暮を発送した後、久しぶりに大型の本屋に立ち寄る。入口そばの平積みにされている本に目をやりながらも足は奥へと進んでいく。専門書、特に理工科学系の本が並ぶ区画に來ると客はほとんどいない。そこで立ち止まると書架を見渡す。分野ごとに並べられた本は隙間なく棚を埋めている。ゆっくり深呼吸し肺を膨らませる。同時に幸せな気持ち満ちてくる。

小さな頃から、本を読むという行為よりも本が並んでいる棚を眺めるのが好きだった。だから、図書館や本屋で本がズラリと並んだ書架の前に立つと気分が高揚する。二年前まで小学校の図書室で補助員として働いていたが、それを終えた今は、何かの折にこうして書架を眺めるのが関の山だった。理系の本は黒や深緑や白の地味な色の

背表紙が多くて落ち着いた雰囲気だ。『量子力学』『熱力学の基礎』などの背に書かれた文字を目で追いながら、しばらく書架をたどって歩く。

趣味の本の書架になると、カラフルな装丁が多くなる。その書架の端に琥珀色の髪をした女性が見えて立ち止まった。三階に住んでいる緑川さんだ。朝見たのと同じ姿なのに、なぜだか見慣れない感じがした。今日は会社に行っただんじゃなかった？ 外回りの仕事でもあったのかしら？

すぐにスーツ姿の男性が彼女の横に來て二人は談笑しながらその場を離れる。私は書架の間から出て彼女が進んでいった方を見ると、ちょうど出入り口から出ていくところだった。緑川さんは茶色のジャケットにクリム色のロングスカートで、長い髪の毛が光を透かした琥珀石のようにきらめいている。上気しているのか頬が赤らんでいて、この世界を謳歌しているようだ。相手の男性は中肉中背で紺色のスーツを着たどこにでもいそうなサラリーマンに見えた。彼女が幸せならいいなと思いつながら、後ろ姿を見送った。

緑川さん母子がレンガの家に引っ越してきたのは五年前だ。何度目かの緊急事態宣言が発令されている時だった。

私と夫が越してきた後に、広い家の一部を貸し部屋と

して有効利用できることに価値を見出した大家の安田さんが、三階の一部を二LDK風呂トイレ付に改築していた。しばらくの間、借り手が付かなかったが、ここへ来て借り手が見つかったと聞いた。

「こんな時期に引っ越しして来るなんて、非常識じゃないか。そんな人たちを住まわせて大丈夫なのか」

久志さんが安田さんに心配そうに尋ねる。

「大山さん、ご心配かけてすみません。実は、知り合いから、娘が急遽住むところを探してるってお願いされまして。どうやら急に旦那さんを亡くされて住んでる家を出なきゃならないみたいなんですよ。お子さんの学校を変えたくないからこの地域で部屋を探してるそうで。人助けと思って頼むと頭を下げられまして断ることができなかつたんです。お母さんと娘二人の女世帯ですから、ご迷惑をおかけすることはないと思います」

マスクを着けているので、表情が読み取りにくいですが、安田さんの声は本当に申し訳なさそうだった。旦那さんを亡くし住むところまでなくなる母子に久志さんも同情したのか、「そういうことか」とトーンを落として話を聞いていた。

それから数日して、緑川さん母子が越してきた。挨拶に現れたのは、四十歳ぐらいの女性と高校二年生と小学六年生の少女二人だった。三人とも黒髪にTシャツとジ

ーパンを身に着け、マスクをしていても健康的な感じがした。

「あ、図書の先生」

小六の少女が声を上げる。彼女は私が図書室で働いていることを知っているみたいだ。私は児童たちがマスクをし始めてから、なんだか顔が覚えられなくなっていて、その子の名前を思い出すことができなかつた。

「何年何組？」

「六年一組、緑川咲穂です」

「咲穂がお世話になってます」

母親が頭を下げる。

「先生が下の階に住んでるなんて、とても心強いです。片親だけの暮らしで至らないところがあるかもしれませんが、よろしくお願いします」

彼女の目元は笑っていたが、瞳の奥が揺らいでいる。夫を失った悲しみか、新しい生活への不安か。見守ってあげなくちゃ。私はお辞儀をしながらそう思った。

最寄り駅に着いたのは三時半頃だった。ゆっくりと家に向かって歩く。太陽はだいぶ西の方へ傾いていて、私の前に影が長く伸びる。影を踏むようにして道を歩いていると、不意に小学校の下校時を思い出す。家の近所はまだ舗装されていない砂利道で小石や土を蹴飛ばしながら

ら歩いていった。帰れば母親が手作りおやつを用意してくれている。蒸しパンだったりあんこ餅だったりプリンの時もあった。私が帰るまでおやつをお預けされた弟たちは私の帰りを今か今かと待ちわびていたっけ。

急にひんやりした風が頬を切る。肩をすくませてシャツの襟を立てる。今、家に帰っても私を待つ人は誰もいない。

駅前から続く通りを左に曲がると、小さなスーパーやクリーニング屋や花屋などが並んだ商店街に出る。理髪店の前を通る頃には揚げ物のいい匂いが漂ってくる。隣は城山精肉店で、精肉のショーケースの横にはフライヤーが置いてあり、そこで揚げ物も売っていた。

「こんにちは」

ショーケースの奥に声をかける。白いエプロンをつけた城山さんは私に気づくとにこやかな顔で近づいてくる。

「いらっしやい。今、病院の帰りですか。ずいぶん待たされましたね」

私は病院の後に百貨店でランチをしてお歳暮を送ってきたことを話す。

「もうお歳暮ですか。まだ十月末なのに、ちょっと早くないですか」

フライヤーのそばでから揚げをフードパックに詰めていた城山さんの奥さんが口をはさむ。

「百貨店に行く機会もないし、日時指定で発送できるから大丈夫」

「最近はお歳暮を送る人も少なくなりましたね。昔はこの店でも松阪牛をお歳暮で送る人が結構いましたよ。まあ、俺が子供の時の話だけ」

城山さんの家は古くからここで精肉店を営んでいる。

「おじいちゃんの代からだったっけ？ 長く続いているお店だねえ。すごいねえ」

「三代目は身上を潰すって言いますから、気を引き締め働きまっせ」

城山さんが明るい声で笑うと、「働かざる者食うべからずだから」と奥さんも笑う。奥さんは細くて小柄で城山さんと並ぶと半分ぐらいの大きさしかないけど、おおらかさは城山さんに劣らずだ。

「でもね、三代続けば末代続くって言葉もあるから。ここまで続けば安泰よ」

「さすが図書の先生、物知りですね。拓海がよく言っていました。先生に聞いたら読みたい本がすぐ見つかるって」

「拓海君は生き物が好きだったね。今でも動物図鑑を読んでいるのかな」

「この間は『世界の未確認生物大百科』を借りてました。雪男って動物ですか？」

そう言って奥さんは可笑しそうに笑う。私もつられて

笑う。

「先生、今日は何かお求めですか」

笑い声が収束した段階で城山さんが本題に入る。

「コロツケを三つください」

「はい、コロツケ三つで二百四十円です」

そう言っていて、城山さんはパン粉のついた生コロツケをフライヤーの中に入れる。油のはじける音がまるで激しい雨音のように商店街に響いた。通行人が音と匂いに惹かれて店に寄って来る。城山さんが「いらっしやい。今日はハムカツが安いよ」とお客さんに声をかける。私が毎朝登校時の見守りをするようになったのは城山さんの気さくな声掛けがきっかけだった。

二年前の三月末に小学校の図書室の補助員を期間満了で辞めた。春休み明けの離任式でお別れの挨拶をするため、朝八時頃に家を出た。家の前の道路は通学路になっていて、この時間は小学生たちがたくさん歩いている。普段は、九時頃に図書室へ通っていたので、家の前をたくさんの児童が歩いている風景を見たことがなかった。神社前の広場を通りかかったとき、「図書の先生」と声が聞こえた。そちらを見ると生き物の本ばかり借りる拓海君がいた。

「おはようさん。ここで何してるの？」

「友達が来るの待ってる」

「こら、目上の人には『待ってます』と言いなさい」

拓海君の横にいた大柄な男性が叱った。

「先生、お世話になっていきます。城山拓海の父です」

そう言って頭を下げる。

「いえいえ、もう契約が終わったので先生じゃないの。お氣遣いなく」

「そうなんです。まだまだお元気なのにもったいない」

「もう少し続けたかったのだけど、ルールでね」

「学校側も規定に縛られず、できる人には正當に働いてもらったらいいのに。お金も手間も必要などころには手厚く、無駄なところは省く。PTAなんかもそうですよ。

このご時世、ボランティアでは限界があるから、やってくれる人にお金を出したらいいんです。学校もPTAもどんどん変わっていかないと回っていかなくなります」
熱く語る彼を見て、学校関係者なのかしらと首をかしげる。それだけで、彼は私の思っていることが分かったのだろう。

「今はただの一保護者です。でも、今後はPTAや地区協議会に携わって改革していくつもりです。そのとっかかりに、ボランティアで登校時の見守りをやります」
そう言って笑顔を向ける。

「やりたがりのお調子者なので」

そこに拓海君の友達がやって来て、「いってきます」と

二人で駆け出していく。

「いってらっしゃい」

「こら、危ないから走らない」

彼は子供たちの背中に声をかけてから、いいことを思いついたという顔で私の方を向いて言った。

「そうだ。もし、お時間に余裕があるなら、一緒に登校の見守りをやりませんか？」

そうして、朝の見守りを始めるようになった。お孫さんの登校に付き添っていた民生委員の峰田さんも巻き込み、今も朝のボランティア活動が続いている。

「先生、これ持って返ってください」

奥さんの声に我に返る。奥さんの手には小さな虫メガネみたいな物が握られている。丸い部分にレンズは嵌まっておらず、穴が開いているだけ。

「これ、ペットボトルのキャップオープナーです。この穴にキャップを差し込んで、ここの取っ手を回すだけでキャップが簡単に開きます」

「あら、助かる。もらっていいの？」

「はい、家にあったものだけど使ってください」

「ありがとう」

私は揚げたてのコロッケが入った耐油袋とキャップオープナーを受け取る。城山さんに「また明日」と手を振って家路につく。温かい袋を胸の前で抱くように両手

で抱える。不意によぎる冷たい風から守ってくれているみたいだ。

商店が並ぶ道路から右に逸れ、住宅が立ち並ぶ道路に入る。前方に繁茂する緑の木々が夕日に照らされて光って揺れている。ホッと口から息が漏れる。鎮守の森が見えるとウチに帰ってきたという気分になる。生まれ育った町でもないのに……。夫が気に入り、夫と暮らし、夫を亡くしたこの町は、既に私の一部になっている。

レンガの家の門を抜けると、二階三階へ続く階段の中間に咲穂ちゃんが座っていた。学校のカバンを脇に置いてスマートフォンをいじっている。横からスポーツライトのように当たる夕日が眩しくないのかしら。黙って見ている私に気が付いて彼女は「こんにちは」とあいさつした。私は「おかえり」と言いながら、階段の下で立ち止まる。

「今、学校帰り？」

「はい、今日は職員会議の日で部活なしだから早いんです」

「卓球部だっけ？ 毎日頑張ってる偉い」

「偉くないです。普通です」

咲穂ちゃんはぶっきらぼうに返事をする。

「そんなことないよ」

朝起きてご飯を食べて学校に行って授業を受けて友

達としゃべって、それだけで十分に偉いのに。

「お母さんは今日遅いんだったね。仕事忙しいのかな」

昼間、本屋で見た緑川さんの姿を思い出す。

「違います」

頭ごなしに否定された。

「男に会ってるんです」

驚いて咲穂ちゃんの顔を見る。彼女は目を背けて投げ捨てるように言う。

「あの人、分かりやすいから。最近機嫌いいし、髪だつてあんな色にしちゃって」

本屋で一緒にいた男性の顔を思い出そうとしたが全く出てこなかった。

「気持ち悪い」

彼女の言葉にハッと息を飲む。記憶の片隅に埋もれていた場面がふいに呼び起こされ、身がすくんだ。何かしやべろうと口を開いたが言葉は出てこない。咲穂ちゃんはスマートフォンに視線を戻し、指で画面をなでている。私は深呼吸して遠くを見る。家の裏手にある鎮守の森はいつも通り静かだ。枯葉が素知らぬふりして木々から舞い落ちる。私はゆっくりと階段を昇り彼女の一段下に座る。持っていた紙袋の口を開けて、怪訝そうに目を向ける彼女の前に差し出した。

「一個どうぞ。城山さんこのコロッケ」

彼女は一瞬躊躇したが、「ありがとうございます」と袋からコロッケ一個を取り出した。そのまま一口かじりつく。

「美味しい」

素直な一言に私はそうっと安堵の息を吐く。彼女はパクペロリとコロッケを胃に収めた。西日に照らされた彼女の顔を私は黙って見つめていた。

「夜ご飯はあるの？」

「お母さんがカレー作ってくれます」

「カレーいいね。私も夜ご飯作らなきゃ」

そう言って立ち上がると、彼女も一緒に立ち上がった。お互い手を振ると、彼女は三階へ私は地面へと階段を進んだ。

コロッケ一個を小皿に入れると、お仏壇に供える。写真の中の夫は相も変わらず笑っている。

あれは章太郎が中学生の頃。私は息子が通っている中学の図書室でボランティアをしていた。図書室の運営担当者には司書教諭の近藤先生だった。彼は三十代半ばのノッポな国語の先生で章太郎も教わっていた。ひょうきんな人柄で生徒からも保護者からも人気があった。

昼休みに破れた本の修理を終えた私は図書室前の廊下で近藤先生に会った。

「あ、先生」

「大山さん、いつもありがとうございます」

「『金田一少年の事件簿』を購入したんですね。借りたいて言ってる子が沢山いて、買って正解でしたね」

そんなたわいもない会話をしていた中で近藤先生が何か面白いことを言っていて、私は大笑いした。その流れで先生の腕を二、三度ポンポンと叩いた。

その時、廊下のすぐ先に章太郎が立っているのに気が付いた。

「章太郎」

呼びかけてそちらへ足を進める。彼は胡乱気な視線を向けると

「気持ち悪い」

と言い捨てて反対側へと去っていく。

私の足は動かなかった。言葉も出ない。ただ章太郎の背中を視線で追いかけるだけ。しばらくの間、時が止まったかのように私は廊下に立ち尽くした。

あの時、章太郎の中で湧きあがった吐き捨てるような気持ちはどうなったのだろうか。過ぎる年月にこすれて摩滅してしまったのか。それとも、積み重なる歳月に押しつぶされ癌のように固まってしまったのか。三十年近く経った今、彼にそのことを聞く機会などない。

章太郎は優しいが、どことなく他人行儀な気がするの

は負い目ゆえにだろうか。

「他意はなかったの」

写真の中で笑う夫に語りかける。

「家族を裏切るとか、母親からの解放とか、そんな大仰なことじゃないのよ。ただ、人気者の先生としゃべれることが楽しかっただけ」

しばらく写真と見つめ合っていたが、久志さんの顔が歪むことも涙を流すこともない。私の目からも涙がこぼれることはなかった。夫の写真に手を合わせると、夜ご飯の準備に取りかかることにした。

厚揚げとキノコとネギのお味噌汁と買ったコロッケと白米のささやかな夜ご飯を食べる。年齢があがるにつれ胃袋が小さくなったのか、すぐ満足してしまう。特に夜は食べ過ぎると苦しくなって眠れない。ちよつとだけが丁度よい体になってしまった。

食事の後、連絡アプリで息子たちへ「お歳暮にクッキーを送りました。十二月の初めに届くと思います」と送信する。すぐに聡次郎からタヌキがありがとうと頭を下げるスタンプが届く。章太郎からは「毎年ありがとう。向こうの家にも伝えておく」と文面で届いた。

お風呂に入って、じっくり体を温めた後、寝室へ入る。電気をつけずに窓を開けた。庭の向こう側は鎮守の森が

鎮座し闇を生み出している。月は木々に隠れてしまいその存在を感じられない。街路灯が庭を薄く照らしている。何もかかかっていない物干し竿が鈍く光る。コオロギがリリーと、キリギリスがジーリーと鳴いている。窓を細く開けたままにしてカーテンを閉めた。

明かりをつけぬまま、程よく涼んだ体を布団の中に潜り込ませる。横向きになって、胎児のように体を丸め、目蓋を閉じた。

暗い中、静かに鳴り響く虫の音がじんわりとほどけた身に染みていく。固く閉じた目蓋の奥に、次第に夕日に照らされた咲穂ちゃんの横顔が浮かび上がる。拗ねたような横顔が、本屋で笑っていた緑川さんの横顔に重なる。表情はまるで違うけれど、鼻筋のラインがそっくり。親子なのに。お互いがお互いの幸せを願う気持ちは絶対にあるはずなのに。でも、子供の心を親は知らないし、親の心を子は知らない。

中学校時代の章太郎の姿が脳裏によぎる。あの時の章太郎の気持ちは分からない。そればかりか、今の息子たちの気持ちだって分かっていない。私が今一人で暮らしているのはそのせいなのかもしれない。違う、私は夫が亡くなった時に、ここで暮らすと自分で決めたんだ。でも、なにか、計り知れない大きなものが采配を振るっているのではないかしら。

アキ

ふと、名前を呼ばれ目を開けた。暗い部屋には人の気配などなく、隣のベッドは空っぽのままだ。

「久志さん」

私のつぶやきに返ってくるのは虫の音ばかり。

大丈夫、大丈夫。

私は両手で両目を覆う。眠れないときにする癖だ。手の平全体で目蓋の上を軽く押す。次第に目の奥が重たくなって、だんだん意識まで閉じられていく。

おやすみなさい。また明日。

カーテンの隙間から朝日が射す。知絵子さんが自転車を押して門を出ていく。民生委員の峰田さんがお孫さんの手を引いて登校してくる。緑川さんが琥珀色の髪をなびかせて会社へ行く。城山さんが白エプロン姿でお店の前に立っている。咲穂ちゃんが笑いながらコロッケを頬張る。

おやすみなさい、また明日の朝、お会いしましょう。